

青年の選択的道德不活性化の研究

大西彩子^a, 木下雅博^b

^a 甲南大学 文学部

^b 甲南大学 人間科学研究所

神戸市東灘区岡本8-9-1, 658-8501

概要

本研究では、選択的道德不活性化尺度を翻訳し、定時制高校で質問紙調査を行うことで、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。調査は、定時制高校の1～4年生12クラス260名の生徒を対象とした。選択的道德不活性化尺度は探索的因子分析の結果、1因子25項目から構成された。また、選択的道德不活性化尺度の25項目について十分な内的一貫性($\alpha=.88$)が認められた。さらに、同時に測定したいじめの態度尺度と学校での4つの攻撃経験との間に関連が示されたことから、本研究で一定の信頼性と妥当性が認められたと考えられる。

キーワード: 選択的道德不活性化, 攻撃行動, いじめ, 定時制高校

1. 問題と目的

日本の2020年の少年による触法犯罪は、32,063件であり戦後最小の件数となっている(法務省, 2021)。少年による犯罪や非行行為は生活満足度の上昇に伴う社会的な緊張の弛緩によって減少傾向にあるものの(土井, 2013), それでも未だ多くの犯罪や非行行為が行われていることに変わりはない。また, 青少年の攻撃行動に関する学校問題として代表的ないじめは, 被害児童・被害生徒に心身症などの短期的影響だけでなく, 対人恐怖や対人不安などの長期的影響も与えることが明らかにされている(亀田・藤枝・会沢, 2018)。これまでも国内外の様々な研究者が, 児童・生徒の社会的・心理的な発達に悪影響を及ぼすことを防ぐために, こうした非行やいじめなどの攻撃行動に焦点を当てた研究に力を注いできた(Anderson & Bushman, 2002; Smith, et al., 2002)。

非行少年やいじめ加害者の「認知の歪み」については, 社会学や脳科学, 心理学など様々な観点から研究が行われている(吉澤・大西・ジニ・吉田, 2015)。例えば, 社会的情報処理研究の理論によると, 人は長期にわたって自分の経験や思考などを基にした記憶のデータベース(知識構造)を構築する。人の行動はその知識構造を基にした情報処理の結果として表出される。Crick & Dodge, (1994)は社会的情報処理の段階を分類し, 「手がかりの符号化」, 「手がかりの解釈」, 「目標分類」, 「反応アクセスと反応構築」, 「反応決定」, 「行動生起」の6つのステップから構成される社会的情報処理モデルを示している。このプロセスの中でエラーやバイアスが

生じると適切な処理が行われず、攻撃行動などの不適切な問題行動が表出されることになる。こうした反社会的行動における認知的側面の重要性が主張される流れの中で、Bandura (1990, 1991) が社会的認知理論を基に、攻撃行動などの問題行動は自己調整過程によってコントロールされるという選択的道德不活性化(Selective Moral Disengagement : 以下 SMD)モデルを提唱し、その有用性が注目されている。自己調整過程は、(1) 自分の行動を知覚・モニターする自己観察、(2) 情報として蓄積された社会的基準や個人的基準による行為の判断、(3) その判断に伴った肯定的評価や否定的評価による自己反応という3つの部分から成り立っている。自己調整過程は正常に機能していると、我々が問題行動をとることを阻止し、向社会的な行動をとるよう導いてくれる。しかし、この自己調整過程が選択的道德不活性化の状態に陥ると、善悪の判断を誤り、攻撃行動などの問題行動を選択してしまうことになる。SMDモデルは、恥や罪悪感などの人の向社会的な感情を抑制し、攻撃行動などの問題行動を引き起こす認知の歪みのメカニズムであるといえる。SMDには7つの下位分類として「道徳的正当化」、「婉曲なラベル」、「都合の良い比較」、「責任の転嫁・拡散」、「結果の無視や矮小化」、「非難の帰属」、「非人間化」が仮定されている。これらの下位分類は個々の役割を持ちながら、全体としてSMDを説明する要因である。すなわち、SMDの中心的な役割は、(1)自分の問題行動を、道徳的正当化、言語的表現の工夫、都合の良い社会的比較によって善い行動または価値ある行動に認知的に再構築すること、(2)責任の拡散または責任を放棄（他者や環境に置き換える）ことによって、自分の問題行動が引き起こす被害に対する個人の主体性を否認すること、(3)自分の問題行動で生じる被害を無視または過小評価すること、(4)被害を受けている人たちに責任を帰し、被害者の人権を否定することで没人間化することである(Bandura, 2002)。以下にSMDの7つの下位分類の説明を本研究で用いた選択的道德不活性化尺度の項目例とともに記す。

道徳的正当化：「友達を守るためにケンカをするならば問題はない」、「自分の家族の悪口を言う人は暴力で黙らせてもよい」など、目的の道徳的正当性を主張することで手段の悪さを隠蔽する役割をもつ。

婉曲なラベル：「許可なく誰かの自転車をとっても、それは『借りている』ことにすぎない」、「気に入らないクラスメートをたたいても、それはただ『教育してやっている』にすぎない」など、行為についての表現を変更することによって印象をやわらかくし、悪質性を実際よりも軽く感じさせる役割をもつ。

都合の良い比較：「暴力をふるうことの方がもっとひどいので、クラスメートの悪口を言うことぐらいは問題ない」、「大金を盗むことに比べたら、少しのお金を盗むことはそれほど悪いことではない」など、他者や外集団の行為と自分の行為を比較することで、自分の行為の悪質性を過小評価すること。

責任の転嫁・拡散：「先に規則を破っている子がいれば、その後に規則を破ろうとする子は悪くない」、「友達が誘ったのであれば、一緒になって悪い事をして、自分は怒られるべきではない」など、悪質な行為の原因を他者や環境のせいにするすることで、自分の責任を軽くしたり放棄したりすること。

結果の無視や矮小化：「生徒の間で悪口を言い合ったとしても誰も傷つかない」、「小さな子どもはからかわれても、興味を持たれていると感じて嫌がらないものだ」など、加害者が被害者の身体的・精神的苦痛を無視したり小さく見積もったりすること。

非難の帰属：「自分の注意不足で物を落としたのであれば、それが盗まれたとしても落とした人が悪い」、「まぬけな人にはひどいことをしてもよい」など、被害者には被害を受けても仕方がないだけの非があるとすることで自分の悪質な行為を正当化すること。

没人間化：「気に入らない人は人間としてあつかう価値がない」、「動物のようにあつかって当然の人もいる」など被害者の人間性を否定し、自分と同じ人権を持った存在として扱わないこと。

SMDは、その後の様々な研究で青少年の非行、攻撃行動との関連が明らかにされ、近年ではいじめとの関連も認められている(Gini, Pozzoli, & Hymel, 2014)。例えば、Teng et al.(2020)は、中国の少年($M = 14.9$ 歳)2,997人を対象とした縦断調査で学級風土に否定的な認識を持ったSMDが高い生徒は、学級風土に肯定的な認識を持ったSMDが低い生徒よりもいじめ加害経験が多いことを明らかにし、学級風土への肯定的な認識がSMDの影響を緩和する可能性について示唆している。しかし、未だ国内で青少年のSMDと攻撃行動との関連を検討した研究はほとんど見られない。そこで、本研究では、定時制高校の生徒を対象に質問紙調査を実施し、SMDの項目分析および因子構造についての確認を行った上で、併存的妥当性を確認するためにSMDと関連することが予測されるいじめの態度および学校内での友人への攻撃経験との関係を検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 調査時期・調査協力者

201X年にQ県公立定時制高校の1~4年生12クラス260名(男子140名、女子119名、不明1名)を対象とした(9割以上の生徒が満16歳で入学している)。

2.2 質問紙の構成

(a) 選択的道德不活性化(SMD)：Bandura et al. (1996)の Selective Moral Disengagement 尺度を翻訳した(31項目)。5件法。

(b) いじめの態度：いじめの態度について測定した Salmivalli & Voeten (2004)の Attitudes toward bullying 尺度を翻訳した(6項目)。

(c) 学校での攻撃経験：Self-reported behaviors during bullying episodes (Pozzoli & Gini, 2010)から4月から調査時の10月までに学校で友人への攻撃行動をどの程度経験したかを尋ねた項目を用いた。5件法。具体的には「クラスメートに変なあだ名をつけたり、脅したり、攻撃したりした」、「私は気に入らない友達が仲間はずれにされるようにしむけた」、「私はクラスメートをたたいたり、おしたりした」、「私は本人がいない所で気に入らないクラスメートの悪口を言ったり、悪い噂を広めたりした」の4項目を使用した。

2.3 倫理的・教育的配慮

質問紙調査は学校長の同意書の下で実施された。参加者は調査目的、成績には無関係であること、回答拒否が可能なこと、データの取り扱いについて説明された上で、本人の同意後に回答した。調査は無記名で実施した。本研究は、著者の所属機関の倫理審査委員会において承認を受けている。なお、質問紙調査の実施後に(a)の質問項目の内容が適応的な考え方ではないことを知るために攻撃行動と認知の歪み（選択的道德不活性化）をテーマにした心理教育の授業を定時制高校教員の協力の下に全クラスで行った。

3. 結果

3.1 選択的道德不活性化の項目分析と因子分析

SMDの各項目は、「まったくそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」で構成されている。各項目得点の平均値と標準偏差を算出し、Table 1に示した。その結果、平均値が高かった項目は「友達を守るためにケンカをするならば問題はない(3.18)」、「誰にも害を与えないような小さなウソならばについてもよい(2.86)」、「虐待を受けた子どもはたいてい問題のある行動をするようになるものだ(2.76)」、「汚い言葉をつかう友達が多い子どもは、汚い言葉をつかうようになって仕方がない(2.72)」などであった。したがって、友人のためにケンカするという目的に正当性があるように感じられる攻撃行動や、被害者が想定されにくいもの、環境が原因で生じる攻撃的な行動については判断が難しく、許容してしまう傾向があるといえる。

平均値の低かった項目として、「許可なく誰かの自転車をとっても、それは『借りている』ことにすぎない(1.21)」、「大金を盗むことに比べたら、少しのお金を盗むことはそれほど悪いことではない(1.22)」、「まぬけな人にはひどいことをしてもよい(1.38)」、「気に入らないクラスメートをたたいても、それはただ『教育してやっている』にすぎない(1.43)」などがあつた。すなわち、窃盗など触法レベルの反社会的な行為や他者に自己都合で攻撃するような行為については否定的な判断をする傾向があるといえる。

選択的道德不活性化（以下 SMD）尺度について因子分析(最尤法)を行った(.35以下の負荷量を示した項目は除外して再度分析を行った)。固有値の減衰状況と SMD については 1 因子構造が妥当であることが先行研究で指摘されている(Gini, Thornberg & Pozzoli, 2020)ことから、本研究でも 1 因子($\alpha = .88$)を採用した。「攻撃されていることに気がつきにくい人は乱暴に扱われても仕方がない」、「先に規則を破っている子がいれば、その後に規則を破ろうとする子は悪くない」、「もっと悪質な違法行為に比べたら、万引きはそれほど深刻な問題ではない」など 25 項目の合計得点を分析に用いた。

Table 1 選択的道徳不活性化の因子分析の結果と各項目の平均値と標準偏差

項 目		M	SD
<選択的道徳的不活性化 ($\alpha = .88$)>			
攻撃されていることに気がつきにくい人は乱暴に扱われても仕方がないと思う	.61	1.69	.93
先に規則を破っている子がいれば、その後に規則を破ろうとする子は悪くない	.59	1.64	.85
もっと悪質な違法行為に比べたら、万引きはそれほど深刻な問題ではない	.57	1.44	.77
誰かをからかってもその人に害を与えていることにはならない	.56	1.96	.90
生徒の間で悪口を言い合ったとしても誰も傷つかない	.54	1.80	.92
まぬけな人にはひどいことをしてもよい	.54	1.38	.68
気に入らないクラスメートをたたいても、それはただ「教育してやっている」にすぎない	.54	1.43	.72
自分の家族の悪口を言う人は暴力で黙らせてもよい	.51	1.96	1.15
友達が誘ったのであれば、一緒になって悪い事をして、自分は怒られるべきではない	.50	1.46	.78
気に入らない人は人間としてあつかう価値がない	.50	1.59	.98
暴力をふるうことの方がもっとひどいので、クラスメートの悪口を言うことぐらいは問題ない	.49	1.82	.93
動物のようにあつかって当然の人もいる	.49	1.64	.95
許可なく誰かの自転車をとっても、それは「借りている」ことにすぎない	.49	1.21	.52
しつげがされていなければ、その子どもが間違っただけで仕方がない	.48	2.60	1.24
親がそうさせているのなら、子どもが間違っただけで仕方がない	.48	2.45	1.23
仲間がバカにされるようなことがあればケンカをしてもよい	.47	2.69	1.17
小さな子どもはからかわれても、興味を持たれていると感じて嫌がらないものだ	.47	2.08	.93
汚い言葉をつかう友達が多い子どもは、汚い言葉をつかうようになって仕方がない	.46	2.72	1.16
大金を盗むことに比べたら、少しのお金を盗むことはそれほど悪いことではない	.43	1.22	.58
子どもがケンカをしたり、間違っただけで仕方がない	.42	2.24	1.05
誰にも害を与えないような小さなウソならばついてもよい	.42	2.86	1.16
悪い環境の中で育った子どもは、荒っぽい行動をするようになって仕方がない	.41	2.58	1.17
虐待を受けた子どもはたいてい問題のある行動をするようになるものだ	.41	2.76	1.17
友達を守るためにケンカをするならば問題はない	.38	3.18	1.16
自分の注意不足で物を落としたのであれば、それが盗まれたとしても落とした人が悪い	.36	2.49	1.25

3.2 いじめの態度の因子分析

いじめの態度尺度について因子分析(最尤法)を行った。35 以下の負荷量を示した項目は除外して再度分析を行った)。固有値の減衰状況と元の尺度の構造から 1 因子を採用した (Table 2)。「いじめに参加するなんて間違っている」、「誰かをいじめたなんてバカらしい」など 5 項目の合計得点を分析に用いた。いじめの態度は得点が高いほど、いじめを否定的に捉えていることになる。

Table 2 いじめの態度の因子分析の結果

項 目	
<いじめの態度 ($\alpha = .72$)>	
いじめに参加するなんて間違っている	.85
誰かをいじめたなんてバカらしい	.71
人はいじめの被害者を助けようとするべきだ	.44
いじめを発見したら、先生に報告するべきだ	.44
いじめは被害者の気持ちを傷つけるものだ	.44

3.3 選択的道德不活性化の性差と学年差について

選択的道德不活性化（SMD）の性差と学年差を検討するために、性別（男女）と学年（4学年）を独立変数、SMD を従属変数とした2要因の分散分析を実施した。その結果、SMD の性別 ($F(1, 242)=1.02, n.s$)と学年($F(3, 242)=.82, n.s$)の主効果および交互作用は認められなかった。すなわち、SMD の得点についての男女差および1年生から4年生の学年差が認められなかった。

SMD の性差については、より詳細に検討を行うために項目ごとの分散分析も行った。その結果、25項目の中で3項目に性差が認められた (Table 3)。具体的には、「先に規則を破っている子がいれば、その後に規則を破ろうとする子は悪くない」は、女子の得点が男子よりも有意に高かった。「まぬけな人にはひどいことをしてもよい」は、男子の得点が女子よりも有意に高かった。「自分の家族の悪口を言う人は暴力で黙らせてもよい」は、男子の得点が女子よりも有意に高かった。

Table 3 SMD で性差が認められた項目の分散分析の結果

	男子 (M/SD)	女子 (M/SD)	F値
先に規則を破っている子がいれば、その後に規則を破ろうとする子は悪くない	1.54/.86	1.76/.85	3.99*
まぬけな人にはひどいことをしてもよい	1.46/.78	1.29/.57	3.88*
自分の家族の悪口を言う人は暴力で黙らせてもよい	2.14/1.24	1.79/1.04	6.14*

3.4 選択的道德不活性化といじめの態度および学校での攻撃経験との関連

選択的道德不活性化（SMD）といじめの態度尺度、学校での攻撃経験を尋ねた各項目間の相関係数を Table 4 に示した。SMD といじめの態度は負の関連が認められた。SMD が高い生徒はいじめへの否定的な態度が低い傾向があることが明らかになった。また、SMD は学校での攻撃経験を尋ねた4項目についても.17~.37の正の相関が認められたことから、SMD と学校での友人への攻撃経験の間にはある程度の関連性があることが示された。

Table 4 SMD といじめの態度および学校での攻撃経験との相関分析の結果

	2	3	4	5	6
1 SMD (N=250)	-.37 ***	.20 ***	.37 ***	.17 **	.23 ***
2 いじめ態度 (N=257)		-.06	-.23 ***	-.11	-.17 **
3 変なあだ名・脅す・攻撃 (N=258)			.18 **	.56 ***	.29 ***
4 仲間はずれ (N=258)				.15 *	.45 ***
5 叩く・押す (N=257)					.18 **
6 悪口・悪い噂 (N=258)					

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

4. 考察

本研究の目的は、定時制高校の生徒を対象に質問紙調査を実施し、選択的道德不活性化尺度 (SMD) についての国内での信頼性と妥当性を確認することであった。SMD については、先行研究と同様に 1 因子構造が認められ、十分な内容的一貫性($\alpha = .88$)が確認された。SMD について、性差や学年差は認められなかった。項目レベルでは 25 項目中 3 項目で性差が認められる項目が存在していたが、全体的には男女の両方で使用可能な尺度であると考えられる。

また、SMD といじめ態度との間に低い負の相関が認められ、SMD が高い生徒はいじめへの否定的な態度が低い傾向が認められた。さらに、「クラスメートに変なあだ名をつけたり、脅したり、攻撃したりした」経験、「クラスメートをたたいたり、おしたりした」経験、「本人がいない所で気に入らないクラスメートの悪口を言ったり、悪い噂を広めたりした」との間に低い正の相関が、「気に入らない友達が仲間はずれにされるようにしむけた」経験との間に中程度の正の相関が認められ、SMD が高い生徒は学校でのこうした攻撃経験が高い傾向が認められた。これらの結果より、一定の併存的妥当性が確認されたといえる。注目すべきは、いじめの態度と学校での攻撃経験との関連については、「本人がいない所で気に入らないクラスメートの悪口を言ったり、悪い噂を広めたりした」経験と「気に入らない友達が仲間はずれにされるようにしむけた」経験との間にのみ関連が認められたが、SMD ではすべての攻撃経験との関連が認められた点である。国内の攻撃行動と認知的側面に関する研究では、外山・湯(2020)が、小学生を対象にいじめ観を測定し、いじめを根本的に否定するいじめ観が、児童のいじめの加害行動を抑制することを示している。今後、さらに国内で SMD についての研究を進めることで、SMD がいじめや非行などの青少年の攻撃行動の認知的側面からのアプローチを考える上で重要な役割を担う可能性がある。また、甲南大学の教育方針は人格の修養を重視しているが、大学生に対して選択的道德不活性化の機能に関する心理教育を行うことは、学生の向社会的行動を促進し、不適切な行動を抑止する上で有効であると考えられる。

引用文献

- Anderson, C. A., & Bushman, B. J. (2002). Human aggression. *Annual Review of Psychology*, **53**, 27-51.
- Bandura, A. (1990). Selective activation and disengagement of moral control. *Journal of Social Issues*, **46**, 27-46.
- Bandura, A. (1991). Social cognitive theory of self-regulation. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **50**, 248-287.
- Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 364-374.
- Bandura, A. (2002). Selective moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Moral Education*, **31**, 101-119.

- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, **115**, 74-101.
- 土井 隆義 (2013) . 後期近代の黎明期における少年犯罪の減少—社会緊張理論と文化学習理論の視点から— 犯罪社会学研究, **38**, 78-96.
- Gini, G., Pozzoli, T., & Hymel, S. (2014). Moral disengagement among children and youth: a meta-analytic review of links to aggressive behavior. *Aggressive Behavior*, **40**, 56-68.
- Gini, G., Thornberg, R., & Pozzoli, T. (2020). Individual Moral Disengagement and Bystander Behavior in Bullying: The Role of Moral Distress and Collective Moral Disengagement. *Psychology of Violence*, **10**, 38-47.
- 亀田 秀子・藤枝 静暁・会沢 信彦 (2018). わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望 (2) : いじめ被害体験が対人関係に与える影響 文教大学教育学部紀要, **52**, 153-166.
- 外山 美樹・湯 立 (2020). 小学生のいじめ加害行動を低減する要因の検討 : 一人要因と学級要因に着目して— 教育心理学研究, **68**, 295-310.
- Salmivalli, C., & Voeten, M. (2004). Connections between attitudes, group norms, and behaviour in bullying situations. *International Journal of Behavioral Development*, **28**, 246-258.
- Smith, P. K., Cowie, H., Olafsson, R. F., & Liefotghe, A. P. D. (2002). Definitions of bullying: A comparison of terms used, and age and gender differences in a fourteen country international comparison. *Child Development*, **73**, 1119-1133.
- Teng, Z., Bear, G. G., Yang, C., Nie, Q., & Guo, C. (2020). Moral disengagement and bullying perpetration: A longitudinal study of the moderating effect of school climate. *School Psychology*, **35**, 99-109.
- 法務省 (2021) . 令和3年版 犯罪白書 法務省
https://www.moj.go.jp/housouken/housouken03_00049.html (2021年12月27日)
- 吉澤 寛之・大西 彩子・G, ジニ・吉田 俊和 (2015). ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動 その予防と改善の可能性, 北大路書房.